

地域に学生パワー



子育て世代も数多く来場した「しんゆりマルシェ」(10月25日、川崎市麻生区で)

「マルシェ」

高齢化の商店街に活気 教室外で大人らと交流

大学生が地域の商店街などと協力し、魅力ある街づくりを目指す動きが活発になっている。大学にとっては課題解決型教育の実践、高齢化が進む商店街にとっては活性化というメリットがあり、両者の連携が深まりつつある。(長原敏夫)

川崎市麻生区の小田急線新百合ヶ丘駅周辺で10月25日、県内外の8大学の学生が企画した「しんゆりマルシェ」が初めて開かれた。80の商店、企業、団体、大学がブースを出し、コンサートなども交えてにぎわいを演出した。来場者数は約2万5000人。メイン会場の住宅展示場には、アクリンや無農薬野菜、ベリカーリなどのブースが並び、カレーや焼きソーセージなどのコーナーには長い列ができた。

発案したのは、同駅周辺の街づくりについて学んだ東京都大都市生活学部(東京都世田谷区)の学生たちだ。同地区は1998年に都市景観大賞を受賞した美しい街だが、「若者を呼び込む活動が不足しているのでは」という印象を受けたという。

子供向けブースも設けた。学生たちの動きを受け、川崎新都心街づくり財団が財団の事業として採択。学生たちのアイデアを基に、財団が運営するという枠組みが決まり、資金問題も解決した。

学生たちは、平本一雄教授の指導を受けながら、宮城大の学生らが仙台市で開いている「泉マルシェ」などを参考にイベントを企画。並行して駒沢女子大、田園調布学園大、東海大など7大学に協力を求め、準備を進めた。

重視したのは若い世代の呼び込みだ。特設ステージでは、ジャズミュージシャンや地元の昭和音楽大の学生らがライブ演奏し、ハロウィーンのグッズ作りなど

の調整など、コミュニケーションが大切ということ学んだ。社会で何かをやるには責任が伴うことを実感した」と振り返る。

平本教授は「企画を実践するには社会的制約を乗り越えなくてはならず、教室では学べないことを体験できる」と意義を強調する。

マルシェは地元にも好評で、麻生観光協会の長瀬敏之事務局長は「協会は高齢化が進み、若者の声を取り入れたくてもできなかった。(学生の参加は)素晴らしいことと笑顔を見せる。

■この記事・写真等は読売新聞社の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。